

学校教育目標

学びを創造し、共に挑戦する子どもの育成

【主体性】

自ら設定した目標に向けて進んで取り組む姿勢

【独自性】

自分の強みを生かして取り組む姿勢

【創造力】

関係性を考慮して新たなものを生み出す豊かな発想

【継続力】

目標実現への見通しをもった粘り強さ

【人権感覚】

他者を大切にする態度

【協働性・仲間意識・所属感】

友だちとのつながりの実感・共感

【社会性】

他者との協調・配慮、集団に対する責任の自覚及び態度

【行動力】

チャレンジする姿勢・自らの手でつかみ取るたくましさ

【自己実現】

振り返りの習慣化・メタ認知

【将来展望】

進路選択・将来の生き方・あこがれ

【レジリエンス】

しなやかな心・柔軟な姿

めざす子ども像

〈下鴨小の「a・i・u・e・o」〉

①mbition : 見通しをもった志のある子

②nnovation : 新たなことにチャレンジする子

③nity : 共に力を合わせる子

④steem : 自分も相手も大切にする子

⑤riginality : 自分らしい学びを創り出す子

育成をめざす資質・能力

納得解を導く力

教科横断的に本資質・能力を重点的に育むと同時に、本校教育活動全般にわたりその成果が表れるようにする。

〈主な手立て〉

- ▶「自分なり」が表れる場の設定
- ▶自分で学び方を選択・決定する場の設定
- ▶自分の学びを整理し、次への方略を明らかにする振り返り
- ▶先哲の考え方、自分、他者との対話の場の設定
- ▶学習環境の整備
- ▶各教科の見方・考え方を子ども自身で働かせることができるような発問、授業デザイン

⋮

感動ある学びを追求するための 「想像力」と「創造力」、そして「実践力」がある教職員

「想像力」……俯瞰的な眼をもち、先を見通す力と、子どものおもい、保護者の願い、教職員の気持ちを想像する力

「創造力」……子どもを成長させる取組やプロセスを創造する力

「実践力」……温度差なく「共通実践」する力

次代を見据え、子どもを育むための効果的で効率的な取組のある学校

「取組なきところに成果なし」

重点的に進める視点

「授業で育てる」

◇育成をめざす資質・能力にスポットを当てる

具体的な姿（モデル像）を共有し、その姿に近付けるための取組や手立てを教科横断的に展開する
〈カリキュラム・マネジメント〉

◇学習集団へ高める

すべての子どもに響き、届く授業づくりにより、学級集団を学習集団に高める

◇子どもの力を活用して子どもを育てる 〈「令和の日本型教育」〉

単なるティーチングにとどまらず、コーチングやファシリテートの手法を柱とする 〈個別最適な学び〉
授業の中に意見交流や練り上げのための話し合いを位置付け、共に深める場面を設定することで、学校の特性である「集団で学ぶ意味」を具現化する 〈協働的な学び〉

◇学びの実感、納得のあるプロセスを大切にしながら進める

少数の意見によって授業を進めるのではなく、すべての子どもが実感したり納得したりしたことをアウトプット等により確かめながら活動を進める 〈「授業の型」や「探究のサイクル」、家庭学習との連動〉

「まなざしで育てる」

◇異学年間のまなざし

上級生は下級生の眼や映る姿を意識して行動し、手本であるという認識を高める 〈率先垂範〉
下級生は上級生のよい姿にあこがれをもち、「自分もあんな上級生になりたい」という希望を抱かせる
「一生懸命がカッコいい」を実感し、自身の姿勢や態度につなげさせる

◇教職員から子どもへのまなざし

教師が決済すれば時間はかからないが、信頼のまなざしのもと、子どものおもいや心の動きを読み取り、子ども自身がどのように考えているのかをしっかりと聴く機会を大切にする

◇子どもから教職員へのまなざし

「教職員は子どものかがみ」であることを自覚し、「言葉遣い」「身だしなみ」「時間を守る」「約束を守る」等の範を示す 〈率先垂範〉

「『効果』『成果』にこだわる」

◇「効果」「成果」のある取組にするために

「今まで通り」の取組から脱却し、その取組により子どもをどのように育てたいのか、そこにかけるエネルギーに十分見合う、もしくはそれ以上の「効果」「成果」が期待できるものなのか等、子どもの現状に合わせて一から取組内容を考える 〈PDCAサイクル〉

◇「効果」「成果」の可視化

地域・保護者への理解を深めたり教職員の意識レベルを揃えたりするためにも、できる限り「効果」「成果」の可視化に取り組む

「地域・保護者と共に育てる」

◇保護者の願いやおもいを十分に聴く 〈傾聴〉

教師側の要件を一方的に伝えるのではなく、その前に保護者の話を十分に聴き、おもいの芯がどこにあるのかを探る

◇保護者・地域との連携強化は間断ない情報発信から

「おたより」に子どもの生き生きと活躍する様子を載せたり、学校・学年・担任として大切にしていることを含んだ記事や載せたりして学校への理解を深め、単なる連絡ではなく学校としての主体性のあるメッセージを発信することにより、子どもを共に育てる気風をつくり上げる